

関西経済の活性化— 必要なのは 「すみ分けと麦踏み」

「関西経済の活性化に何が必要か」と問われた時、私の頭には3つ“必要なもの”が浮かびます。

第一はロジスティックスの強化。特に道路整備です。日本の大動脈とも言える関西と関東を結ぶ高速道路は名神高速道路一本のみ。事故や災害で万が一この道路が通行できなくなると日本は機能不全に陥ってしまいます。新名神高速道路などをあともう少しつなげれば複線になるのですが、それができていません。その他にも舞鶴-大阪間など、関西にはあと5km、10km、道路がつながっていないことが原因で生じている物流のロスが多い。今後、関西が中国やインドなどアジア諸国とのマーケットのパイプをさらに強化する戦略をとらなければならないことを考えると、敦賀・舞鶴といった日本海の船の動きを整理する必要もあります。それには港に荷物を運ぶ道路が整備されていなければ話になりません。道路整備は時間のかかる仕事ですから、今から取りかからなければならないのは明らかです。

第二は地域経済の発展に欠かせない産学官連携。これまでとは違う手法で取り組むことが必要だと感じています。現状では新しい研究課題が出ると日本全国にその研究を行うチームが発足し、政府が一番研究が進んだチームの成果を使って産業化・事業化をしようと、全チームに同じように人とお金を投入しています。これでは多くの時間と資金が無駄になってしまいます。

京都企業が成長する理由を聞かれ、神戸大学の加護野教授が「すみ分けと麦踏み」と答えておられたのを聞いたことがあります。これは、人のまねが嫌いでありオリジナルのものを追求したいとの意識が強く、同じ分野の製品を扱う企業でも競合せず、「すみ分け」ができていて、そして、「麦踏み」とは、麦は踏まれると強くなり収穫が良くなることから来たたとえで、何かを成そうとする人に覚悟を持って取り組むことを促すため、



矢嶋 英敏 氏

Hidetoshi Yajima

島津製作所会長(関経連副会長)

あえて厳しく突き放すという京都人の気質をよく表している言葉です。この「すみ分けと麦踏み」は産学官連携にもあてはまります。1つのテーマを皆でつき回すのではなく、地域ごとに研究テーマを「すみ分け」、1テーマにつき2、3の共同体が取り組む、あるいは液晶・鉄鋼など分野ごとにリーダー企業を決めて研究を進める方がずっと効率的で効果的です。

第三は企業間の連携です。私はこれから日本が進むべき方向は「環境とエネルギー」だと考えています。関西にはこの課題に対して非常に高度なノウハウを持っている企業や熱心に研究している大学が多く、連携しやすい環境が整っています。それに加えて、99.7%が中小企業と言われる関西企業の中には、キラリと光る技術力のある企業が多数あります。そういった企業を見つけ出し、連携を進めれば、関西人が持っている“気さくさ”も相まってすばらしい結果が期待できるのではないのでしょうか。では、どのようにキラリと光る企業を見つけるか。私が会長を務める京都工業会では、今、産業界で注目されているテーマに必要な技術内容をまとめて会員に発信していますし、会員企業が役所へさまざまな相談をしたり、産学連携を進める際にアドバイスする場合があります。根気強く情報発信を続け、会員から反応が返ってくるのを待っています。会員企業の皆さんに「あそこに相談すれば何か教えてくれそうだ」と信頼していただくことがまず第一歩。それは関経連も同じだと思いますね。

談